ライプニッツの力学構想

——「原始的力」の根源性をめぐって——

松　王　政　浩

「存在すること existere はすなわち働くこと agere である」(Grua II 587)というテーゼに暗示されるように、ライプニッツにおいて真なる実体として捉えられたいわゆるモナドは、その根本的規定を「内在的力」とする。ここで「力」という言葉によって意味されるものは、決して物理的事象を司る限りでの力[1]にとどまるものではない。物体が、実体によって基礎付けられた「現象」に過ぎないとするライプニッツにあって、物理的な力はむしろ「派生的」dérivatif なものとされ、その根源にある「原始的力」force primitive こそが実体の実体性を、つまり「真なる統一」をもたらすものであるとされた。したがって、この原始的力は、単なる現象を超えて存在の根本に関わるという点で、「形而上学的領域に属すもの」(G IV478)と呼ばれることになる。

ところが、ではその原始的力の「原始性」「根源性」は一体いかなる点に存するのか、ということになると、ライプニッツはそれほど明確な記述を与えているわけではない。力に関する記述を見る限り、あたかもこのような力はライプニッツの実体概念（いわゆるモナドロジー）の中で論理的に要請されているだけであって、その根源性は定義上与えられたものにすぎない、という感じすら受ける。しかし、ライプニッツが物理的力学を「実体の力学」にまでわざわざ拡大していったのは、彼自身、原始的力が単なる論理的要請ではなく、真にあらゆる力の源となりうべき実質的な根源性を有しているという確信があった

[1] 物理的な「力」と言っても一義的でないのはもちろんのことである。あとで述べるようにライプニッツの物理的な力は今日の「運動エネルギー」概念にほぼ相当するものであった。ところが、この意味での力はニュートンの『プリンキピア』には含まれておらず、またデカルトの言う力は瞬間的な運動量に相当したなど、このような物理的「力」という語の多義的使用が、その後の物理の発展に少なからぬ影響を与えたことは周知の事実である。cf. *Concepts of Force*, Max Jammer (『力の概念』高橋毅・大槻義彦訳 講談社)

からではないのか。ライプニッツは、力学を形而上学の中にはっきりと打ち出すことになった論文の中で、原始的力が「実現作用 l'acte や可能性の充実だけでなく、根源的な活動 une activité originale をも含んでいる」(G Ⅳ 479)として、断片的にではあるが、原始的力に単なる定義上の理解を超えた根源性があることを垣間見せている。これは結局、その後も明確にされなかったわけであるが、我々はライプニッツの他の哲学的記述の中にそのヒントを見出だすことができないだろうか。

本論は、その手掛かりを彼の「可能的世界説」に求めていく。そしてライプニッツが捉えようとしていた原始的力の更なる根源性について、一つの解釈を示してみたい。[2)]

1．派生的力と根源的力

まず、いかにして「原始的力」は導入されるに至ったか、その経緯を追うことによって、原始的力のおよその輪郭を明らかにしておこう。

議論の出発点になるのは、デカルトの延長実体説批判、および延長概念にのみ基礎付けられた物体の力学に対する批判である。そもそもライプニッツの「力」の概念は、デカルトの幾何学的な運動論に反対して新たな力学を構築することに端を発したものであり、『形而上学序説』(1686)以降、実体概念がモナド論の形に徐々に仕上げられていく中で、次第に実体との関わりをが論じられるようになっていったのである。（なおライプニッツも『抽象的運動理論』1670においては、運動法則を延長のみに基礎付ける考え方をしていた。）

周知のごとくデカルトは、思惟実体 res cogitans と延長実体 res extensa とをそれぞれ独立した実体として立てる。物体はただ単純属性としての延長 extensio をしか含まず、それゆえ変化や運動に対しては無差別な indifferens もの（あるいは代替可能なもの）であって、運動は「場所の変化」でしかないため、恒存されるのは「運動量」quantité de mouvement であると説く（『哲学原理』第２部 36)。これに対してライプニッツは、およそ次の二通りの仕方でその批判を行い、

[2)] ライプニッツの「力」の根源性をめぐっては、ハイデッガーの先駆的な研究があるが、私にはこれは余りにもハイデッガー自身のいわゆる「存在論的差異」ontologische Differenz に引きつけた解釈であると思われるので、本論では特に取り上げないでおく。cf. *Nietzsche* ,II,pp.454-7

自らの理論の展開を試みるのである。

(1)［力学の原理探求から］まず、ライプニッツは力の量的側面を論じ、デカルトの運動量保存則が力の保存則にはなりえないことを示す。『形而上学序説』17節、あるいはそれと同年に『アクタ・エディトールム』誌に発表されたある論文の中に、同様の例を用いてこれを示している。論点を簡単に言うと、今日位置エネルギーとして知られているものが運動エネルギーに変換された際に、（この運動エネルギーをライプニッツは「力」と考えたのであるが）その場合の「力」の量的測度となるのはmv^2であって、デカルト派が主張するような mv にはならない、ということである。[3]そしてライプニッツは、この力を表すために「活力」vis viva なる新しい用語をそれに当て、それが延長のような、いわゆる「形象的思惟」imagination（形や模型など感覚に直接訴える仕方で物事を捉えること cf.G Ⅱ111)によっては捉えることのできないものであることから、「一般的な力学の原理は幾何学的であるよりはむしろ形而上学的原理」(G Ⅳ 444)であるように考えられていくのである。無論、この力はまだ「現象」に関するものであり原始的力ではない。しかしこのような物理的力のうちにも既に形而上学へと至るべき契機の潜むことが確認されたのである。

さらに、ライプニッツは物体の衝突現象の際に物体が示す「抵抗」resistentia という事実もデカルトの「延長」だけからでは説明できないのだとする。もしデカルトの言うように、物体がただ延長しか内包せず変化や運動に対して無差別なのだとすると、ある物体が他の物体に衝突した後に少しも自分の速度を失わずに相手を動かすことができることになるが、これは明らかに事実に反する。そこでライプニッツは、この事実に鑑みて、物体にはもともと抵抗力あるいは不貫通性 impénétrabilité としての或る力が、その背景になければならないとし、さらにこの力によって、物体は持続したもの aliquid durabile あるいはアプリオリに同一性を保持できるものになるのだ、と主張する。この力はライ

[3]その後、力をめぐるライプニッツ派とデカルト派の論争が半世紀にも渡って展開されるが、註 1) にも述べたように、両者は同じ「力」という名前の下に異なる概念を論じていたに過ぎない。結局、デカルト派は与えられた等しい時間にわたって作用する二つの一定の力 f とFを比較すると、その比が mv／MV になるということを言い、ライプニッツ派は与えられた等しい距離にわたって作用する二つの一定の力の比がmv^2／MV^2になると言っているのであって、双方に矛盾はなかったのである。ライプニッツにとって力は「生じる結果の量」によって評価されなければならなかった(G Ⅳ 443)のであり、この態度は彼の形而上学的力学全体にも及んでいる。

プニッツによれば、もはや単なる物理的力ではない。物体の示す抵抗は物体の現象としての最低限の統一を前提とするものであるから、その背景にある「実体」に根差すものでなければならない、つまり形而上学的な原始的力でなければならないのである。ただし、この「統一」は諸事物の間に抵抗を生じさせるという意味で、消極的な意味での統一を表していると考えられる。

(2)［実体概念から］デカルトでは「延長」は単純で根源的（原始的）な属性と見做されているが、実は延長概念の内には、すでに「連続」continuitas や「共在」coexistentia という概念が認められる、とライプニッツは主張する。（共在する多数のものの連続的な反復 repetitio が「延長」であるとされる。G Ⅱ 269) したがって、そのような、さらなる概念に分解されうる「延長」は、単純な概念ではなく、実体の根源的属性にはなりえない。さらに、延長だけを属性とする実体 res extensa によっては、物体における多様性、差異性、変化などをアプリオリに説明することができない。むしろ「現象の差異と変化の原理」を内に含むものこそが実体と考えられねばならず、それゆえ実体は、過去や未来の状態を各々の視点から「表出する」exprimer ものである。（いわゆるモナドの基本概念。）こうした実体の特性が「真の統一」unitas vera を与えるのであり、そのような様々な様態の基礎となりうる積極的な統一を与え、実体に実体性を付与するものとして、原始的力が措定されなければならないのである。

以上、二通りの仕方で原始的力は導かれるのであるが、実は(1)と(2)では言われている原始的力の意味が異なることに気付かれよう。そこで『力学試論』Specimen Dynamicum (1695)に示された「力」の分類によって、この二者の区別および原始的力と派生的力の区別をさらに確認することにしよう。

まず、原始的力のうち、(2)で述べられたものは「原始的能動的力」vis activa primitiva と呼ばれ、より本源的な力であり、我々がこれから問題にしようとするものである。しかし人間を初めとして被造的な実体の本性は、ただこの能動的力にのみ存するのではない。もし能動的力のみを有するならば、その実体が表出する表象は何の制限ももたないことになるので、それらはすべて明晰判明なものとなるが、実際我々の表象は必ず混雑さを含むものであり、また空間（存在の秩序）と時間（継起の秩序）という制約のもとでしか生ずることができない。このように被造的実体が必然的にもつ認識論的かつ存在論的制約（ラ

イプニッツにおいて表象は単なる認識内容ではなく、ある種の存在論的規定を負わされる）は「原始的受動的力」（または「第一質料」materia prima ）と呼ばれ、これが(1)の意味の原始的力（制約になるという意味での消極的な力）である。この力は、我々に「身体性」として現れる。そして我々被造的モナドはこの原始的力の二つの面が併さって完成されたものである。

ところで我々が普通「物体」massa と呼ぶもの（第二質料）は、我々が必然的に課せられる制約である原始的受動的力によって、本来非連続なもの（共在する多数のものの反復）を連続と見てしまう「混雑な表象」の結果現れる「現象」なのであって、そこには「思考上の統一」une unité de pensée しかない。けれども、だからといって物体は非実在なのではなく、それは背景にある実体の原始的能動的力によって「よく基礎付けられた」bene fundata 現象であり、何らかの実在性をもつとされる。（逆に原始的能動的力が実際に働くときには必ず継起する派生的力として働くと言われる。）それゆえその現象を司る物理的力は、原始的なものに対して「派生的」dérivatif であるといわれるが、やはり実在的なものなのである。[4)]

さて以上が、ライプニッツの哲学に原始的力が導入されるおおよその経緯であるが、このうちライプニッツが「原始的力」という言葉で通例意味し、そして我々がさらにその根源性を問わんとするのは、「原始的能動的力」である。

2．原始的能動的力と欲求(appetition)

さて、上で示された原始的能動的力について、さらに立ち入ってみよう。

まずライプニッツの実体概念をもう一度あらためて確認してみる。延長をその属性とすることが拒まれた実体は、ただ不可分であるのみならず、多様性や

[4)] 原始的能動的力がいかにして派生的力となるかについては、せいぜい、実体の自発性が物体においては弾性 elasticus となる(G Ⅳ 475-476)ということが、一種の宣言として述べられている程度で、具体的に述べられていない。また場合によっては、あたかもこの関係を無視するかのように、前者に機械論的説明を適用することを、また後者には形而上学に訴えることを禁じている。けれども、精神的実体を支配する「目的原因」が結局は物体を支配する「実現原因」をも統括する（G Ⅳ 445）と述べられたことなどから、形而上学的力が物理的力を統合する可能性をライプニッツが心に留めていたことは、おそらく否めないのである。（本論の末尾に述べたように、ひょっとすると量子論的な解釈により、この両者の統合を現代の我々はいずれ成しうるかもしれない。）

差異が一切それに基づくような基体であり、真の統一を有するものでなければならない。そこでこれを「形而上学的厳密」に訴えて捉えると、各々の実体は他の実体と実質的な交通 communication を行うことなく、その実体に生じるすべてのことがらを「表象」perception として自らの内に予め有していて、それぞれの内的原理に従ってこれを自発的に展開する、ということになる。このように一つの表象から他の表象へと自発的に推移を起こす内的原理をライプニッツは「欲求」appétition と呼んだ。

この欲求を作用させるのが原始的能動的力であることは、ライプニッツがデ・フォルダーに宛てた手紙に次のように述べていることからも明らかである。「原始的力は単純実体の内的傾向力以外のものではありえず、それによって実体は自分の本性の法則に従って表象から表象へ移っていく。」(G Ⅱ275)

さて、ではこれだけで原始的能動的力の根源性は尽くされているのだろうか。確かに、我々はこの力の「能動性」については、上のテーゼ以上に多くを語る必要はないだろう。またライプニッツは『第一哲学の改善と実体概念』(1694)と題された短い論文の中で、原始的力が「スコラ派の認める単なる潜勢的な力 potentia nuda とは異なり、……それは実現作用あるいはエンテレケイアを含んでいて、作用能力と作用それ自身の中間にあり、傾向力 conatus を含んでいる。」(G Ⅳ469)と述べているのだが、この記述により、この力の一層精確な能動性の意味さえ知ることができる。しかし、たとえその能動性あるいは自発性がどれほど明確であっても、もし原始的能動的力に、「予め定められた」内包の一つずつを順番どおりに展開していくという意味しか与えないとすると、それはちょうど、一種の絵巻物をある秩序にしたがって引き出すのと変わらないことになり、この力の根源性とは、高々、実体概念の中で「定義上」与えられた名目的な根源性しかもたないことになるだろう。根源的なのはむしろその内包の方であって、原始的力そのものはそれに付随する何かでしかない、ということにもなりかねない。

そこで、もし原始的力にさらに実質的な根源性を求めようとするなら、上のように原始的力を、ただ通りいっぺんの実体概念の図式の中だけで捉えるのでは不十分だということになる。もちろん上の原始的力の記述に「誤りがある」というのではないから、上の記述を保持しつつも、それ以上の根源性を問うこ

とのできるような、一層大きな枠組みの中に原始的力を位置付けてみなければならない、ということである。では、その一層大きな枠組みとは何か。それは、『弁神論』を中心に展開され、ライプニッツ形而上学の中でもとりわけ今なお新鮮な刺激を我々に与えてくれる「可能世界」説である。次節では、この説と原始的力とのありうべき接点を探る。

3．可能世界における可能的なものの「実在の要求」

上に述べたように、表象がいかに推移するかは、各々の実体の内的規定として予め定まったものである。しかし、ライプニッツはそれが「必然」（形而上学的必然 nécessité métaphysique ）として、すなわち「反対が矛盾を含む」l'oppose implique contradiction (G V481)ような仕方で定まったものではなく、起こるのは確実であるが強いられない、ただ「傾けられる」s'incliner だけのものであることを再三に渡って確認する。仮に敢えて「必然」という言い方を許すならば、後者は「仮定によって」 hypothétiquement （あるいは「道徳的に」）必然(G VI178)なのである。ライプニッツによれば、ふつう「偶然」と呼ばれる相、すなわちその反対も可能であると考えられる相は、結局すべてこの仮定的必然において説明されることになる。それゆえここから、実体の内的規定を展開する原始的力が単なる「盲目的力」でないことが、ともかくも明らかになろう。

ところで実体の内的規定とは、何度も言うように「表象の推移」に他ならないのであるが、その表象の具体的中身はというと、「すべての被造物（個体）がその各々に対して、また各々が他のすべてに対してもつ関係によって、単純実体は他のすべての実体を表出する exprimer 関係をもつ」(G VI616)という記述からわかるように、自らと関わりを有する（全宇宙の）他の実体との関係一般なのである。そうすると、一つの実体の一連の表象を支配する内的規定（法則）は、ただ単にその実体に固有なものなのではなくて、それは何らかの仕方で、その実体を含む宇宙全体にも拡張されねばならないことになる。つまり宇宙全体の系列・関係を決定するような或る法則が存するのである。当然、この法則も唯一絶対の法則ではなく、仮定的必然性しかもたない。そこからライプニッツは、現実のこの世界とは異なる他の法則に支配された世界の可能性について、

積極的に論じようとする。そしてこれが、「創造主の自由の擁護」という、彼にとっての一つの大きなモチーフ（『弁神論』のモチーフ）と結び付いたときに、創造に先立って「無数の可能世界」infinité de mondes possibles (G VI 126)が創造主の悟性に永遠に存する、という主張がなされることになる。これがいわゆる「可能世界説」である。

ところがこの可能世界説について、次のような一見奇妙な説明が付け加えられる。それは、可能的事象の「実在の要求」exigentia existentiae (G VII 195)と言われる事柄に関するものである。ライプニッツは、永遠なる可能世界からいかにして時間的な実在世界が生じるかを説明するのに、それをすぐさま創造主の能力に訴えることはせず、可能的事象（この場合、可能な「個物」なのか、可能な表象なのかということは曖昧にされている）に内在する完全性の程度に応じて、いわば可能的事象自身が自分の実在を要求し、争う、ということを認める。

この一事があるために、ともするとライプニッツの可能世界が、現実の個物と「個体性」「実体性」という点で実質的な差異を含まない完成された個物（エンテレケイア）で満たされていて、それぞれの可能世界がはじめから相互に一切干渉や関係をもたない独立自存したものとして存するという解釈を産み、その結果、現実世界のうちに現実の個物のもつ可能性や偶然性といった様相を含み入れる上で一方ならぬ困難を負わせるのである。

しかし可能的事象のもつ「事象性」realitas については、ライプニッツはその根拠を創造主の悟性に置き(G VI614)、それは未だ「観念的な一性」をしか持たないものであることを認めているし、また、上記の可能的事象どうしの争いについても「観念的」idéal であると断っている(G VI 236)。それゆえ「確固とした個物」としての可能的事象どうしの争いが「先に」あって、その「後に」結果として一意に、また付随的に現実的事象が展開するという解釈は適当でないと考える。（このような解釈に陥れば、我々が問題とする原始的力の根源性の議論がまた振出しに戻ってしまうことは明らかである。）

では、この一事をいかに解釈すればよいのであろうか。実はこの解釈が我々の先の問題において非常に大きな鍵を握る部分であり、これをある解釈に導くことによって、我々は原始的力に、求むべき一つの根源性を与えることができ

ると思われる。

私はその解釈上の手掛かりが、ライプニッツの「創造」の概念にあるものと考える。ライプニッツのモナド概念の中では（神もまた一つのモナドであるが）各々のモナドの完足 complet 性（それ自身、概念としては過不足なく完成されており、「実在」existentia のきっかけを神から受け取るだけという状態）のために、神と被造的モナドとの間には或る特異な関係が成り立つことになる。すなわち、もし神が個体的実体にただの一度、世界の創成時に「実在」のチャンスを与える働きしかせず、その後個体が各々の完足性に従って神との直接的な関係を介さずに（つまり全くの独力で）自己展開を行うというのであれば、神と被造的モナドを余りに引き離して考えてしまうことになる（神の被造者への介入が余りに貧弱なものになる）し、またプロティノスにおけるような「流出」emanatio ということをここで持ち出してしまうと、今度は神と被造的モナドを余りに引き付け過ぎてしまい、個体の完足性ということが維持できなくなってしまうのである。そこでライプニッツはこの二つの創造説の丁度中間に相当するような創造のあり方を提示する。それは「電光放射」des fulgurations と呼ばれる考え方であり、被造物は神のこの作用により、刻々 de moment en moment 産み出される(G VI614) と捉えられることになるのである。もちろん、この考え方はデカルトのそれとは異なる。デカルトの場合、実体に生ずる諸状態は互いに全く独立のものであるが、ライプニッツの場合、既に述べたように、一つの状態から他の状態への推移の系列が存するのである。また、このような電光放射ゆえに各々のモナドの原始的力が否定されると考えてはならない。この説で述べられていることは、神がモナドの原始的能動的力の発現を助けるということであり、原始的力が神から切り離された「絶対的なもの」ではありえないということであって、原始的力はちゃんと存するのである。つまりモナドはその原始的力によって内的な系列を正に自ら産み出そうとし、そして「その都度の」神の助力によってこれが実現可能となるのである。（このような原始的力の本性を表現するのに conatus「傾向力」という言葉は何と適切であることか。）

さて、このような創造説に立って先程の「可能的事象の実在の要求（実在をめぐる争い）」ということを考えてみよう。この創造説によると、現実的な事象の系列は、系列「丸ごと」その初めに現実性という或る特別な身分を一挙に

与えられるのではなく、表象の推移の度ごとにそれは神の助力によって獲得されるのである。そうすると現実的系列は現実として生じることがたとえ「確実」であっても、生じる以前の表象は単に可能的であることを嫌でも免れない。そして可能的である限り、そこに他の可能性（可能的事象）との本質的差異はないわけであるから、現実化した事象の一寸先は、ただただ茫漠とした可能性の大海が広がっていると考えないわけにはいかないのである。（可能性とは正に、他の可能性のもとで可能である事象を言うからである。）これは、現実的事象が、瞬間瞬間、他の可能的事象が等しく可能である中から「他を差し置いて」実在世界のうちへと産み出されていくことを意味する。つまり現実的事象も可能性の身分において、ある意味では他の可能性の脅威に常々晒されているとも言えるのであって、その中からたった一つだけが選別されていく過程というのは一種の争いを思わせるのである。これこそ、先の「可能的事象の実在をめぐる争い」と呼ばれたことがらではなかったか。（なお当然のことながら、ここでの可能的事象というのは、「可能な表象」であることは言うまでもない。）このような解釈によって、我々は原始的力の一つのありうべき「根源性」を語りうる文脈を手に入れたことになる。

4．原始的力の根源性

我々は原始的力の「定義上の」根源性、すなわち一連の表象系列をただ順に展開していく原動力、という考え方に満足できずに、更なる根源性を求めて模索してきた。この定義上の根源性に満足できなかったのは、原始的力が単に現実的事象の系列「のみ」に関与しているという感じを我々に与えたからであろう。しかし、実は原始的力は、ただ現実的事象の系列を貫くだけのものではないのである。

表象の系列は、生じることが確実ではあっても必然ではなく、「瞬間瞬間に」他の無数の可能的事象とのいわば「争い」の中から選び出されなければならないものであるということがわかった。すなわち各々の実体は、創世時に自らの内包のすべてと共に一挙に現実世界という枠の中に押し入れられてしまうのではなく、半ば可能世界の領域に身を残しつつ、完全なる現実化をつねに待ち侘びているものだと考えなければならないのである。そして原始的力はと言うと、

決して機械仕掛けのように自動的な作用をもつものでなく、たえず神の電光放射に助けられつつ刻々と発現し、まだ単なる可能性でしかない或る事象と、他の等しく可能なものを差し置いて関係を結び、「現実」という実を生み落としていくということになる。こうしたことを考え合わせてみれば、原始的力は決して現実的事象として（結果的に「現実的な」）相連なる諸々の事象と「のみ」関係するものではない。道なきところに道をつけるがごとく（あるいは無数の道の中の一本を選び取るがごとく）、茫漠たる無数の可能性（可能的世界）の只中に働き、そして現実を織り成していくのである。（ただそれは無差別なものではない。また必然的なものでもない。「傾き」という形で或る種の自由を含みもったものなのである。）

つまり、現実性もしくは現実世界の中にとどまらない、より大きな可能世界という領域がその真の作用域であるということ、言葉を換えて言えば、可能世界と現実世界を結び合わせる動的な接点であるということ（両者を貫いているということ）、これこそが原始的力に我々が求むべき、ありうべき「根源性」ではないかと私は思う。

これすら「定義上の」根源性にすぎないだろうか。いや、そのような陳腐なものではない。なぜなら我々がふつう、「力」という言葉で思い描くのは「現実の事物が現実の世界の中で及ぼしうるもの」ということだからである。たとえば、初期条件が与えられればあらゆる運動の結果が予測可能、というようなニュートン力学のテーゼも「現実の事物の」「現実の世界での」事象という前提をもつものであろう。ライプニッツも物理的・派生的力学についてはそのような決定論的（現実世界内で閉じているという）見解を支持する。（彼の「力（エネルギー）の保存則」がそれを物語っていよう。）しかし原始的力はその背後で、現実世界を突き破っているのである。このように一般的な「力」のイメージでは捉え切れない領域を作用の場としているところに、単なる定義上ではない、更なる根源性を主張しうる所以があると思うのである。[5)]

[5)] もしこれがライプニッツ哲学の正当な解釈であるのなら、どうしてライプニッツ自身はこのような根源性をはっきりとは述べなかったのか。理由は二つ考えられる。一つは、可能的事象の事象性 realitas と現実的事象の事象性が果たして本質的な差をもつものなのかどうかについて、ライプニッツには最後まで迷いがあったということである。（実際、これまでの行論からすれば、ライプニッツの哲学では両者が或る通底する事象性をもっていると考えていくのが自然であり、それゆえにこそ、通

……ところで、ライプニッツの原始的力の根源性に関する一つの解釈を見終わったいま、このようなライプニッツの力学（もっとも本論で論じた力学は一つの「解釈」にすぎないが）と、1957年ヒュー・エベレットに提唱されて以来物議を醸している量子論的「多世界論」とを、どうしても引き付けて考えてみたくなるのは私だけであろうか。もちろん17(～18)世紀の形而上学に量子論的観測の問題など結び付ける術もないし、またライプニッツのいう可能的事象の事象性と多世界論における各世界の実在性とには少し隔たりを感じるが、少なくとも、ライプニッツと同時代のニュートンが「力」の究極的本性について踏み込んだ言明を一切避け、結局その力学が量子論に及ぶ接点を持ちあわせないものであったのに対して、ライプニッツが、多分に思弁的な仕方によってではあっても、「力」を敢えて形而上学の領域に持ち込んでその根源性を論じうるものとし、結果、量子論的世界観をどこかに含みもった世界像を提示することができたという点で（つまりその許容性という点において）、ライプニッツの力学的構想を再評価したいという思いに少なからず駆られる。しかし果たして、ライプニッツ力学と量子論（多世界説）との類似は見掛上のもの、偶然的なものにすぎないのか、それとも何か本質的な共有点を有するのか。これは（量子論的多世界論自身の評価も含めて）いつの日か見届けてみたい課題である。

［引用略号］

G ; C.I.Gerhardt, *Die philosophische Schriften von G.W.Leibniz*. I-VII

Grua ; G.Grua, G.W.Leibniz: *Textes Inedits*.

（後続のローマ数字は巻号、アラビア数字は頁数を示す。）

（まつおう　まさひろ）

底するものを支配する「力」という考えが成り立つのであるが。）もう一つは、物理学的力学の転換期にあって、彼の力学研究のウエイトがどうしても現実の現象を扱う方に傾きがちであったということである。この二点を除けば、おそらくライプニッツに我々の解釈を退けるべき理由はなかったのではないかと思う。